

読書メモ2018年3月号

—加藤八千代著『朝永振一郎博士・人とことば』（共立出版・1984年）ほか—

やなぎさわかつひろ
柳沢克央 編

（信州・上田仮説サークル）

2018年3月17日（土），3月例会用レポート

◇はじめに

前回までの「読書メモ」と同様，サークルで発表することを目的とすると，読書がはかどるので，今回もこのメモを作成しました。自身のため，記録を残すことが第一目的です。みなさま，よろしく（適当に）おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり，引用あり，要約あり，感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。（私物）と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校図書室蔵書。

3月末に異動になりそうです。2月26日（月）現在，異動先は不明ですが，進学校になりそうだという話は聞いています。篠ノ井高校図書館の蔵書を返却して，新しい環境への移動へと準備を進めなければなりません。こうした機会に荷物を大胆に整理することは仕事を進める上でとても大切。きっかけとして上手に活用したいと思っています。

◇2月号で読んだ本

◎水野敬也+長沼直樹『人生はワンチャンス！』（文響社・2012年）

◇3月の読書記録または読書メモ（順不同）（下線は柳沢による）

◇森重湧太著『一生使える見やすい資料のデザイン入門』（インプレス・2016年）

見やすく，説得力のあるパワーポイント・スライドの作り方を書いた本。見開き2ページ構成で理解しやすい。パワーポイントでプレゼンをする機会が多い娘（高校生）に読ませたかったので，知らんぷりしてリビングにあるこたつの上に数日間放置。読んでくれたかな？

この本のポイントはスライド共有サービス「Slide Shere」を活用すること。転勤しても必要だから、転勤先の学校図書館になかった場合でも買ってもらうためにメモ。

◎ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉『武満徹（作曲家）』（筑摩書房・2016年）

この本のハイライトは武満徹の代表作がニューヨーク・フィルの練習で楽員たちに受け入れられ、小澤征爾（当時 NYP 副指揮者）によって初演されるまでのドラマ。異文化交流の生々しい迫力に圧倒された。その部分を引用して紹介。

…小澤はオーケストラと琵琶と尺八を合わせる練習をする前に、まず琵琶と尺八のパートだけを演奏し、楽団員に聴かせることにしました。はじめはざわつきながら聴いていた楽団員たちも徐々に静まり、演奏が終わる頃には耳をすませている様子が竹光にわかりました。そして、「ブラボー」という声とともに拍手が起こりました。それは心からの拍手だということを武満は感じました。

それからのリハーサルはスムーズに進みました。また、繰り返しリハーサルするたびに、その音は精彩のあるものになっていきました。そこには演奏の技術だけでなく、お互いに対する信頼や尊敬といったものが加わっているようでした。お互いに理解を深め、演奏はさらに豊かなものになっていきました。（107 ペ）

◎山本義隆著『近代日本百五十年』（岩波新書・2018年）

最新刊。信毎の広告で知り、篠高図書館にリクエストして購入してもらう。通読はしていない。面白そうな所を拾い読み。

科学史家である著者の記述は緻密で重厚である。意外な一節を発見したので引用する。

…戦後、1951年に日本学術会議の学問・思想の自由保障委員会が全国の研究者にアンケートを出し、過去数十年間で学問の自由がもっとも実現していたのはいつかと問うたのに対して、戦争中という回答がもっとも多かったのである。大部分の理工系の学者は、研究費が潤沢であるかぎり、科学動員による戦時下の科学技術ブームに満足していたのであった。

戦前から多くの科学者と親交のあった科学評論家・松原宏遠の書には、戦時下での物理学について、「目を物理学会にむけると、何としたことか、ここだけはきわめて明るく、なかでも仁科芳雄を総帥とする理論物理の若手たちは、いわゆる冬の時代の日本にあり

ながら、自由に澁瀬として研究にいそしんでいるのが印象的でした」とある(松原, 1966)。実際にも、理研はしばしば「科学者の自由な楽園」と語られてきた。しかしその「自由」は、理研指導部の戦争への全面協力によって保障されていたのである。(189 ペ)

◎ハリー・ウォン／ローズマリー・ウォン共著『世界最高の学級経営』(東洋館出版社・2017年)

学級運営法についてのマニュアル。それなりに有益である。明治図書から出ている学級経営に関する近刊, 福地孝宏著『中学教師新任3年目までの仕事の教科書』(明治図書)等とかなり共通の内容であり, 特に目新しい記述はない。

この本を読んで, 日本のよく本を読む学校教師のレベルは国際的に見てかなり高そうだとということがよくわかった。

◎佐々木基編著『高校教師これだけはやっておきたい黄金の三日間』(明治図書・2010年)(私物)

◎赤坂真二編著・片桐史裕著『学級を最高のチームにする! 365日の集団づくり』(明治図書・2017年)(私物)

上記二冊はネット検索で見つけて購入。高校で担任になる事前準備でいろいろ考えて決めたあと, 最終的に洩れや過不足がないかどうかをチェックするためにザッと読むといい本。また読むとしたら来年だろうか。どうでもいいことは適切な方法の真似をする。大切にしたいことは, よく考えて自分の方法で試してみる。クラスを立ち上げる時, こうした姿勢で臨む場合に役に立つ。

◎『世界の大思想6・ベーコン(ノヴム・オルガヌム他)』(河出書房・1966年)

◎『世界の名著22・デカルト(方法序説他)』(中央公論社・1967年)

◎『世界の大思想7・デカルト(方法序説他)』(河出書房・1965年)

以上三冊は長期貸出扱いで自宅本棚に鎮座していたもの。いつでも原典に当たれるという保険のようなものだが, ちょっと豊かな気分で過ごせたので, ふと気が向いたときにポツポツ拾い読みをすることができただけでも, その意義はあったと思う。「帰納法」と「演繹法」を最初に思いついた人はやはり素晴らしいと思う。長い間, ありがとう。

◇特別企画…「廃棄本」からひとつかみ

昨年度、篠ノ井高校図書館から出された廃棄本から自由に持って行って良い期間があり、ひと山ほどピックアップして化学研究室で積ん読していた。この春、いよいよ異動することになり、この本たちと向き合う必要が出てきたので、特設コーナーを設けて対話をする。

◎◇加藤八千代著『朝永振一郎博士・人とことば』（共立出版・1984年）

言わずと知れたノーベル賞科学者、朝永振一郎博士のエピソードがたくさんちりばめられた評伝的エッセイ集。amazonのレビューには何も書き込まれていないが、この本は傑作だと思った。朝永氏は落語や小咄、ジョークが大好きだったことが良くわかる。また、有志によりサークル例会のような気楽な集まりが定期的に行われていたこともわかる。気に入ったところを抜書きして紹介。

「メタ認知」と「日本人にとっての法と正義」とについて深く考えさせられる文章。

*

《ともだち—第三の自分》

あるとき、例会のあとで、朝永先生は、つぎのような小ばなしをされた。

「ある人がイギリスの作家、サマセット・モームに質問をした。

『フランス人はお好きですか』

モームは答えた。

『いいえ』

『イギリス人は？』

『いいえ』

『イタリア人は？ インド人は？ 日本人は？ アメリカ人は？』

どこの国民に対してもモームの答は『ノー』であった。そこで質問者は、

『あなたの好きなのは、一体誰ですか？』

ときいた。するとモームは答えた。

『ともだちです』

いつもの私だったら、そのまま、つぎの小ばなしを待っているのだが、急に気が変わった。L'Etranger（異邦人）という詩が浮かんできたからである。

「小ばなしではないんですが…。ボードレールがつぎのような詩を書いています」

私は書棚から岩波文庫の『パリの憂愁』をとりだし、読み始めた。

一君は一体、誰が一番好きなんだ。え、謎のような男よ！ 父親か、母親か、妹か、それとも弟か？

—僕には、父も母も妹も弟もない。

—友だちか？

—君は今日の日まで、僕がその意味さえ知らない言葉を使った。

—祖国か？

—それが如何なる緯度の下にあるのかさえ僕には明かでない。

—美人はどうだ？

—そう、もし不死の女神でもあることなら、悦んで好きになりましょうが。

—金は？

—君が神を嫌うように、僕はそいつが大嫌いだ。

—何と。一体、それじゃ、何が好きなんだ、不思議な異邦人よ！

—僕が好きなのは雲さ—。流れゆく雲……あそこを……あそこを……あの、素晴らしい雲なのさ！

私が読み終わると、朝永先生は、

「流れゆく雲」

と、一言ポツンといわれた。それから……、

「雲といえば、あなたの詩集『子供の夕暮』に、『独り遊び』というのがあったネ。ぼくには、あの詩と『ボート遊び』とが、とくに印象深かった」

私は、その場で『独り遊び』を口ずさんだ。

こうしてぼくが 寝ころんでいるのを

ぼくは知っている まるで他人のように

こうしてぼくが 雲を見ているのを

ぼくは知っている まるで他人のように

ぼくは ぼくを知っているぼくと

いつも ふたり

けれども そのふたりを

知っているぼくは ひとり

朝永先生はいわれた。

「その終わりの二行が、この詩の生命だと思う。

草の上に寝ころんでいるのは第一の自分、その自分を、まるで他人のように見ているのは、第二の自分。第一と第二の自分を知っているのは、第三の自分。

ぼくにも、そのような第三の自分がいるような気がする。いつも遠くにいて、決して姿を見せないただ一人の友だちのように……」

1959（昭和 34）年に発表した私の第二詩集『子供の夕暮』には、さまざまの詩人や友人たちから、それぞれの批評や感想がおくられてきた。しかし、このときの朝永先生の言葉ほど、私の心を捉えたものはない。（163 ペ）

＊

《「秤と剣」と「聖徳太子」》

1960（昭和 35）年 3 月、会員の岡小天博士、岡村和子さんが共訳で、ロンドン大学癌研究所の物理化学者、バトラーの著作『科学は人間をどう見る』を、白揚社から出版した。さっそくみんなで、その書評をやってみてはとの話になり、そのための座談会が行われたのは六月六日。

そのとき、朝永先生からさまざまな発言があったが、なかでも、とくに印象の深かったのは、つぎの言葉であった。まず岡先生が、「この本の第二部では、野蕃人、原始人は動物とは非常に差があるけれど、野蕃人と文明人のちがいは非常にわずかである」との著者の見解を紹介した。すると、朝永先生は、

「これは自分で読んだものではありませんが」

とことわり、つぎのようにいわれた。

「ある未開人の社会では、人殺しをした犯人をつかまえて処罰するのに占いで、だれが犯人かを占ってもらう。現に殺人の現場を見ていて、犯人を知っている人がいても、その人の証言を容れないで、貴様が犯人だと、占いで出た人を死刑にして、そしてそれにだれも文句をいわない。こういう未開人の心理は、文明人にはわからないことの一つなんです。しかし考えてみると、文明人もおんなじことをやっている。

ぼくがそれを感じた一つの例は、ある大学で、ある研究中の事故で死んだ人があった。その人は論文を提出中だったので、とにかく非常に気の毒だということで、論文の日付をさかのぼって、生きていた間に論文が通ったということにして、学位を贈ったんですネ。これなんか、今の話と同じでしょう。みんな、論文が通ったのは死後だということを知っているのに、書類上、日付をつけなおして、それに文句をいわないという点。お役所

は、こんなことをしょっちゅうやっている」

座談会が終わったあと、私は先生にたずねた。

「さきほどの、未開人が占いで犯人を決める話……。文明人は占いのかわりに、あらかじめ法律をつくっておき、それに基づき裁きますネ。しかし、裁判官といっても、人間ですから、人によって法律の解釈がちがってきます。当然、判決にも過誤が生じる。いったい、正しい裁判とはどういうのでしょうか」

すると、朝永先生はつぎのような面白い話をされた。

「野蕃人と文明人のちがいは、非常にわずかであるかもしれないが、文明人同士のちがいは非常に大きい。

例えば、イギリスとわが国とでは、同じように法治国家でありながら、裁判に対する国民の考え方、見方がひどくちがっている。

イギリスでは、たとえ起訴されても、その裁判中は、被告はどこまでも罪のない人として取扱ってもらえる権利があるし、一般の社会人もそれを当然と考え、被告を呼びつけなどしない。

ところがわが国では、ひとたび被告となると、まだ裁判が始まったか始まらないうちから、呼び捨てにする。このちがいはどこからくるのであろう」

そして、

「これはあるイギリスのジャーナリストからきいた話だが」

と前おきされたあと、つづけた。

「ロンドンの中央刑事裁判所の屋上には、片手に秤、片手に剣を持った、ギリシアの正義の女神の像がある。秤は証拠の重さ軽さを測り、正しい結論を引き出すことをあらわす。剣はその決断を実行する権力を示している。この女神は、伝説によれば、もともとは目かくしをされていたのだそうだが、それは、測りの目盛りを見ないということではない。被告や原告側弁護士から、賄賂を差し出されたり、おどされたりしても、それらには目もくれないで、公正な裁きをするためなのだそう。もっともデンマークの諺には、『正義の秤は、財布の乗った方へ傾きやすい』というのがあるそうだから、やはり目かくしのない方がいいようだ。

ところで日本の最高裁判所長官室の壁には、三つの肖像画がかかっているそうだ。いずれも聖徳太子で、一つはその手に巻物を拵げ、太子の学識を示し、二つ目は幼い子供を抱いて太子の慈悲を、もう一つは武装して国の権力を示している。つまり、大いなる知性と寛容と、そして力とを身につけた人物が裁判をすることになっているそうだ。少

なくとも、それが理想になっている……」

しばらくの間、朝永先生は何かを考えているかのように黙っていられた。それから急に、きっぱりといわれた。

「一般の日本人が、法廷に期待しているものが、このイギリス人のいう知性と寛容と力であるとする、罪の決まらないうちに被告を呼びすてにする習慣があるのは、なぜであろうか。

つぎは、聖徳太子が手にしている巻物の内容だが……。これははたして、イギリス人が見るように、知性とか学識を示しているものだろうか。聖徳太子は、わが国で最初に憲法を制定された方。西暦でいえば 604 年。この巻物は学識ではなく、憲法を示しているのではないだろうか。憲法と解釈すれば、子供は天皇からみれば赤子である民を示していると思われる。するとこの太子像は憲法を冒した民を罰するだけではなく、教化する意味とも受け取れないだろうか。

ともかく、同じ法治国家とはいっても、日本の裁判にないものがイギリスの裁判にあり、イギリスの裁判にないものが日本にあるとだけは、いえるようだ」

それから八年後、私は私の肉親が経営している会社から起った、かの有名なカネミ油症事件に巻きこまれた。それから約十年後に、刑事判決がおりた。私はその判決文を読み、今さらのように、このときの朝永先生の言葉をかみしめた。そして今もかみしめている。日本の裁判には憲法判断はあるようだが、それに先だつ証拠の事実認定の判断をする秤は、果たしてあるのだろうか。

そういえば思い出したことがある。アメリカの映画『真昼の決闘』の一シーンである。5 年前に逮捕したあばずれ、フランク・ミラーが釈放され、復讐のため帰ってくると知った判事は、ゲイリー・クーパー扮するところの保安官、ウイル・ケインをひとり置き去りにして、町から逃げ出す。そのとき判事室の壁からとりはずし、手提げカバンの中に入れたものは、大きな秤と剣とを持った正義の女神像であった。

＊

紹介した二編の他にも、味わい深い文章がたくさん含まれていて、読み応えがある。この本も処分しようと思ったが、もったいなくて処分できなくなってしまった。

◎◇大矢行著『アニメ&コミックのための絵コンテ作法』（代々木アニメーション学院・出版局 1994 年・この本だけはラベルがないので進路指導室の放出品と思われる）

面白い本。ハードカバーで分厚い。進路指導室に寄付された本と思われる。熟読はし

ていないが、映画創りとコミック・アニメーション創りの橋渡しをする本だと感じた。
「あとがき」をそのまま打ち込んで勉強してみる。著者本名は大矢敏行氏、1937年、茨城県生まれ。東映株式会社で映画修行。代々木アニメーション学院・学院長（当時）。

＊

「あとがき」

本書を読み終えられて、「絵コンテ」が、用紙の上だけで、適当に画面を組み合わせてつないでゆけば良い、などという性質の創作でないことが、ご理解いただけたと思います。

「映像作品」は、あらゆる（映像の技法）と（映像の手法）が持つ表現性の特質を十分にわきまえて駆使し、創造されねばなりません。それが、アニメーションにおいては、まず「絵コンテ」の段階で、この最も重要で基幹的な作業が開始されるのです。

これから「絵コンテ創作」を目指す若い方々に、ぜひ養ってほしいものがあります。それは、映像表現のための諸々のアイテムが、どんな型状であり、どんな色合いであり味わいであるか、を修知した上で、それらを如何にコーディネートすればシナリオの精神を生かし、人々の心に訴えることができるか、という才感を自家薬籠中に納めることです。

究極のところ、「創造」は“体で覚える”以外の到達路はない、と私は思っています。「創造に王道なし」と云いかえることも出来るでしょう。

「映像」も、またしかりなのに、なぜか、アニメのアーティスト達は「映画創り」が“頭で覚えられる”と甘く考えています。そのくせ、“作画は描けば描くほど上手くなる、体で覚えなくちゃ駄目だ”とくる。“作画”は体で、“映画”は頭で充分。これでは理屈に合いません。

「オンドリヤ、エーガなめとんチャウカ！」

現代日本のアニメ界の監督達は、ほんの二、三人の例外を除けば、歴代、他人の創った映画を見よう見真似で、絵コンテ用紙に写してきた。つまり“紙の上で映画をマスターしてきた”のです。

その証拠に、ちょっとアニメで売れた監督が、「今度は実写映画をやる」などと大見得きって、そのくせ成功したタメシは皆無に近い。

「映画」の「修行」をしてない人間に実写ドラマの監督を全うできるはずがないのです。

学校の教室で英語を覚えたつもりでも、いざとなるとしゃべれない。五線譜上でおたまじゃくしの並べ方をいくらやっても、ちゃんとした音感訓練を受け、演奏の経験がな

ければ、作曲のまねごととは出来ても正規の音楽は書けない。凡百のアニメの監督などというのも、まあこの類でしょう。

要するに「映画の修行」をしていない人間に映像造形としての「絵コンテ」の創作は、しょせん無理”なのです。

現行、おおかたやられている「アニメの絵コンテ」というのは、まがいものです。「ドラマ映像の造形」になっていないのです。(特に人間のからむ芝居がいけません)

テレビの料理番組の通りに“肉 200 グラム”“椎茸 3 ケ”“塩大さじ 1 パイ”“砂糖小さじ 2 ハイ”とやって、「オッ、うまい！！」と唸らせる本物の美味しい料理が絶対にできないと同様、用紙の中で覚えた「パン」やら「TU・TB」やら「FI・FO」などを、どんなに調理したって、本物の料理にはなりません。

再びいいます。アニメ監督たちは“「作画」は修行せねばならないが、「映画」には修行はいらない”と云う、こんな理屈は通らない。

私事で恐縮ですが、私は 18 才から 30 才までキッチリ「映画」を修行した人間だと思っています。中でも初めの 5 年は、当時第一線の映画監督やカメラマン・照明技師・録音技師のもとで下端の助手として、それこそ追い使われながら、彼等がどうやって映画を創ってゆくかを文字通り、眼のあたりにしながら、体で覚えてきました。

そうした日々で、つくづく感じたことは、「観る映画は楽しいが、映画創りを覚えることが、これほど、苦しく、プライドを傷つけられるものだとは…！」でありました。これが、今思うと映画修行だったのです。

はじめの 5 年間は劇場映画の撮影現場で、それから後の 7 年はテレビ映画、CM、PR 映画、アニメ映画、教育映画と、弱小なプロダクションの間を転々と拠（よりどころ）を換えながら、その間、自分でカメラを回しながら映像を撮っては自身で編集するという貧乏な活動屋人生の明け暮れの中で、劇映画からニュース映画までわが手で撮影し、繋いできたフィルムの長さは 20 万フィートに達します。

こうした過程で、“映像カン”のようなものが知らず知らず身体に修まったのです。

こうした 12 年間は、拙いながら私の映画修業時代だったのです。

とはいえ、これはとても生涯を賭けて携わっている先輩や後輩の映画人に比べたら、なんと、お粗末なことか。しかも映像界でなんら目覚ましい業績を残していない自分が、エラソウに能書きたれるつもりはサラサラありません。ただ、ひたすら、現在のアニメ界の主要な人々の中に、あまりにも映画修行たらずが目立つ故、つい声を荒らげてしまったような塩梅なのですが、少なくとも、自分が青春時代に身につけた古びた経験でも、

悲しいかな、まだまだ使えると知った時、それでは、ちゃんとした映画創りに基づく「絵コンテ作法」でも残そう。アニメ界で食べさせていただいて居ることへの報恩に、と考えてのことでもあります。

もっとも、幸か不幸か（という表現は適切ではありませんが）、いまだわが国には、アニメのための「絵コンテ」の作法を説いた参考書が皆無に等しいので、「拙著が、後進に対するいくばくかの警鐘になれば！」などと大仰に構えた気持ちが、実はどこかにあったかな？（了）

＊

賛否は保留するが、この文章はとにかく「熱い」。そこに惚れた。この「あとがき」を読んでしまったので、しばらくはこの本を手許に置いて、勉強したいと思っている。コミックの手法は、文章では伝えられないことをいとも簡単に伝える事ができるので、いま、とても魅力を感じている。

◎◇立花隆著『宇宙からの帰還』（中央公論社・1983年）

アポロ宇宙船で月などの宇宙体験をして還ってきた宇宙飛行士達へのインタビュー集。宇宙体験をする前と後とでは価値観の大きな変化が起きている人が多いことがわかる。ザッと飛ばし読みをして、もっとも印象に残った部分を抜書きする。

＊

さて、ラッセル・シュワイカートと、バックミンスター・フラワー（柳沢注：この人は炭素分子「フラーレン」の発見者）の対談番組に話を戻すと、フラワーは、「上」「下」という方向づけは地球上でしか有効でない、宇宙で有効な方位づけは「内側に」「外側に」でしかないだろうといった。そして、対談の合間に、即興の詩をサラサラと走り書きし、それを番組が終わった後でシュワイカートに渡した。シュワイカートはそれをいまでも大切に持っているというが、次のような詩である。

Environment to each must be

“All that is,excepting me.”

Universe in turn must be

“All that is including me.”

The only difference between environment and universe is me……

それぞれの人にとっての環境とは

「私を除いて存在する全て」

であるにちがいない。

それに対して宇宙は、

「私を含んで存在する全て」

であるにちがいない。

環境と宇宙の間のたった一つのちがいは、私……

見る人、為す人、考える人、愛する人、受ける人である私

この詩を何度も読み返して、シュワイカートは目を開かれた思いがしたという。彼がアポロ 9 号で宇宙体験をしたのは、1969 年。フラーと対談したのは、その 8 年後の 1977 年である。この詩によって、自分の八年前の宇宙体験をより掘り下げることができるようになったのだという。自分自身の体験を自分がこれまであまりに狭くとらえていたことに気づいたという。

別に宇宙体験にかぎったことではないが、体験はすべて時間とともに成熟していくものである。とりわけそれが重要で劇的な体験であればあるほど、それを体験している正にその瞬間においては、体験の流れの中に身をゆだねる以外に時間的余裕も意識的余裕もないから、その体験の内的含意をつかむことができるのは、事後の反省と反芻を経てからになる。もちろん、それは覚醒した意識上での認識の話であって、潜在意識下では、その体験の瞬間から、何らかの変化がはじまっている。どんな体験でも体験者を少しは変えずにはおかない。とるに足りない体験は取るに足りないくらいに、小さな体験は小さく、大きな体験は大きくその人を変える。といっても体験の価値的大小は主観的判断だから、ある人にはとるに足りない体験にすぎないものが別の人にはその生涯を変えるような大きな体験になるということも、またその逆もしばしばある。いずれにしろ、潜在意識下ではじまった変化が、当人が気づかずにはいられないくらい大きくなったときに、人はそれをもたらした体験の内的意味を解釈しようとして、意識的な反省をはじめ。それがどれだけ成功するかは、もっぱらその人の内省能力にかかわる問題だ。

世の中には、いかなる体験についても、手軽な解釈に便利な常套句が沢山用意されている。たいていの人はその中で満足する。それに満足できない人は、自己認識を求めて内的反省の旅に出る。そして、一杯のお茶を飲んだときにふとよみがえった記憶からはじ

まって、残りの一生をかけて『失われし時を求めて』を書いたマルセル・ブルーストのような人物も出る。

宇宙体験という、人類史上最も特異な体験を持った宇宙飛行士たちは、その体験によって、内的にどんな変化をこうむったのだろうか。人類が百七十万年間もなれ親しんできた地球環境の外にはじめて出るといふ特異な体験は、それがどれだけ体験者自身によって意識されたかはわからないが、体験者の意識構造に深い内的衝動を与えずにはおかなかったはずである。(28 ペ)

*

あのフラレンの発見者がこんなところで登場しているとは驚きだ。それにしても、35年前に書かれたものとは思えない、現在読んでも新鮮で、深みと読み応えのある文章だと思うのだが、どうだろうか。

◎◇保阪正康著『自伝の書き方』(新潮選書・1988年)

著者のいろいろな自伝に対する評価が味わい深く記されていて面白い。ひとことで言えば本書は「自伝論」の本である。

全十章から成る。それらは次の通り。1.人はなぜ自伝を書くのか、2.テロリスト達の自画像、3.キリスト者の告白、4.女が書く女の怖さ、5.タレント自伝の素顔、6.ノーベル賞科学者の晩節、7.スポーツ選手の栄光と影、8.実業を書かない「実業の神様」、9.冒険家はかく語る、10.新聞記者の哀しい自己弁護、あとがき、巻末に自伝作品リストあり。

著者が自ら書いたリード文が表紙にあるのでそのまま引用しておく。

*

近代日本で人はどう生きたか、何を考え、どのような行動を刻んできたか、それをさぐるのに自伝を丹念に読む方法がある。先人たちの自伝は、もっとも有効な人間学の教科書である。自伝・自分史ブームといわれる時代、自伝を書くことが、じつは全人格的な戦いだということに書く側も読む側も気づいているだろうか。自伝の書き方の核には自己透視の鋭い眼こそが望まれるのである。

*

この本は貴重な本だ。処分せずにしばらく手許に置いておくことにした。

◎◇佐川芳枝著『寿司屋のかみさんおいしい話』(講談社・1996年)

著者は1950年生まれ。寿司屋のかみさん。そのタイトルの通りの内容。後味がいい

い。

◎◇植田康夫著『編集者になるには』（ペリかん社・1994年）（進路指導室放出本）

震えるほど面白い。この本もしばらく処分できない。気に入った部分を引用。

○とにかく、人に会うということは、特ダネに近づく第一歩といってもよい。（21 ペ）

○編集者の ABC

本や雑誌を編集することを職業とする編集者には、さまざまな能力が要求される。その能力は、努力して伸ばせるものもあるし、天性のものとして、最初から身につけていなければならないものもある。つまり、編集者には適性というものがあるのだが、その適性とは何かについて考えるとき、示唆的なのは布川角左衛門氏の『本の周辺』（日本エディタースクール出版部）の最終章「編集という仕事」に収められた論文である。

この章の「編集の要領（P.POSTA）」という論文で、布川氏は編集者に求められる職能として、「編集の ABC」という条件をあげている。この ABC とは何かというと、布川氏が訳したサー・スタンリー・アンウィンの『出版概論』という本にイギリスの美術評論家レーモンド・モーティモアの至言として引用されている「出版業は芸術と技能と商売とを一緒にしたもの（at once an art , a craft , and a business）」を転用したもので、A は art, B は business, C は craft の略である。

すなわち、布川氏によれば、編集は本質的には作家や画家が作品を創るのに似た創作的な仕事で、「芸術家的な操作（art）」という側面があるが、同時に出版物をつくるための「職人的な技巧（craft）」も必要とする。そして、企画の立案、決定、執筆者との連絡、約束、原稿の準備、誌面の構成そのほかをそれぞれの諸条件のもとで手際よくすすめる「実務（business）」の才能も必要とする。

これら三つの才能がうまく統一されないと、編集という仕事は成り立たないのだが、こういう芸術家であり、職人であり、実務家でもあるという編集者の職能をふまえながら、布川氏はさらに「編集者の ABCDE…」という論文も書いている。この論文では A から順に Y まで（Q と X は除く）それぞれのイニシアルにちなむ英語をあげながら、編集者にとって、何が要請されるかを的確に整理している。ここにあげられている条件は、そのまま、編集者の適性におきかえてもよく、編集者に要請されるものがほぼ網羅されている。そこで編集者の適性を考える手がかりとして、まず「編集者の ABCDE……」を紹介してみよう。

(A) Appeal to readers. の A をとったもので、読者を重視し、読者に訴えるということ。

- (B) **Business.** 編集を具体的に取り運び、計画的に実現するために必要な **business.**
- (C) **Cultivate.** 「編集者は文化を愛する人である」という使命感を持つこと。
- (D) **Design.** 「ブック・デザイン」の知識と感覚。
- (E) **Editorship.** 編集担当者としての見識、自覚、専門的な技能。
- (F) **Foresight.** 社会の動向、環境の変化に伴う読者の諸事情を察知して「先を見通すこと」
- (G) **Good Judgement.** 時々の事態に応じての「適切な判断」
- (H) **Health.** 「健康」
- (I) **Idea.** 「アイディア」思いつき、発想、創意で編集企画の酵母になる。
- (J) **Journalism.** 「ジャーナリズム」ジャーナリストとしての資質である「知的好奇心、問題探求心、公正にして機敏な判断力」などを持つこと。
- (K) **Knowledge.** 「知識」企画に必要な知識以外にも、レイアウト、校正、印刷、製本などの技術上のことや、著作権、出版契約などについての知識。
- (L) **Language.** 「言語」用語、用字、語法などについての知識と技能。
- (M) **Memory.** 「記憶」記憶力に優れていること、思いつきや見聞を忘れないため、よく「メモ」をすること。
- (N) **Nose.** 「鼻」見たり、聞いたり、読んだりするものから、「何かをかぎつける勘」あるいは「企画や原稿の良否とその処理などを、直感的に判断する識別力」
- (O) **Originality.** 新しいものを生み出す「独創性」
- (P) **Practice.** 「実践」と「熟練」
- (Q) 該当語なし。(柳沢注：私なら **Quest**＝「探究」「追求」を挙げるが、敢えて入れていないのかもしれない。いろいろと疑問＝**Question** が湧く。それが「狙い」か?)
- (R) **Responsibility.** 「責任感」仕事の担当者として職務を果たし、著作者、読者に対して責任を果たし、文化的・社会的責任を担う。
- (S) **Sense.** 道義心 (**Moral sense**)、良識 (**Good sense**)、常識 (**Common sense**)、といわれる場合の「心」や「識」を意味し、また出版物の「感じ」など。
- (T) **Time.** 「時」の観念。時間の経過、時期 (**Timely, Timing**) の重要性を認識すること。
- (U) **Understanding.** 「理解」できるだけ多くのことに関心を持ち、進んで人々と理解し合うこと。
- (V) **Vision.** 「想像力」どんな出版物をつくるか、たえず新しい企画をめざして **Vision** を描くこと。

(W) Writing. 「書くこと」執筆者に原稿を依頼し入手する以外に、自分でも文章を書けること。

(X) 該当語なし。

(Y) Young. 「若さ」精神的にも肉体的にも若々しいこと。

(Z) 該当語なし。(148 ペ)

○必要とされる能力

布川氏は「編集者の ABCDE……」として、以上の条件をあげているが、ここには編集者にとっての適性が何であるかが明確に示されている。真にすぐれた編集者となろうとすれば、ここにあげられた条件を満たす努力を必要とするのだが、編集者がいかに多面的な能力を要求されるかについては、前章で紹介した故・池島信平氏によるつぎのような指摘もある。

- 一、編集者は企画を立てなければならない。
- 一、編集者は原稿をとらなければならない。
- 一、編集者は文章を書かななければならない。
- 一、編集者は校正をする。
- 一、編集者は座談会を司会しなければならない。
- 一、編集者は広告を作成しなければならない。(『雑誌記者』から)

六番目の「広告を作成しなければならない」というのは、出版物の内容については編集者がいちばんよく知っているのだから、その編集者が広告も書くべきだと、池島氏はいうのだが、ことほどさように、編集者というものは、多様な才能を要求されるのである。

しかし、この資質をぎりぎりに要約すれば、最初に紹介した「編集の ABC」に落ち着く。Art, Business, Craft の三つだが、この「編集の ABC」については、出版評論家の故・鈴木敏夫氏も『基本・本づくり』(印刷学会出版部)の中で、その重要性について述べている。

「私は古くから若い人たちに『出版人に必要なのは ABC の三つだよ』といつづけてきました。ABC とは Art (芸術), Business (営業実務), Craft (技術) を略したものです。アートは“芸術”と直訳するより、“知的創造力”(企画力に通じる)といった方がいいかもしれません」

鈴木氏はこう書き、さらにサー・スタンリー・アンウィンが『出版概論』の中で「『出版業とは芸術と技能と技術と商売を一緒にしたもの』で、そのためには、いくつかの資質の奇妙な、並はずれた組合せが望ましいことになる。」と書いていることに気づき、ニ

ヤリとしてしまいました。まさに出版人には **ABC** が必要であることを、この巨人は知っているのです。私の **ABC** 論は決してアンウインの請売りではないのですが、偶然にしろ、このイギリス出版界の重鎮だった故人の考え方と同じだったことは、私を大いに満足させました」と書いているが、この鈴木氏の指摘にもあるように、編集者にとっては、**Art, Business, Craft** という三つの条件は、欠かせない。

この三つの条件のうち、**Art** について鈴木氏は、「“芸術”と直訳するより、“知的創造力”（企画力に通じる）といった方がいいかもしれません」と指摘しているが、この鈴木氏の指摘と、さらに池島氏のいう「編集者は企画を立てなければならない」という指摘を重ね合わせてみると、編集者にとって最も大切な適性は企画力ということになる。

（150 ペ）

○適性を満たす条件とは

この適性が編集者にとっては第一条件となるが、この第一条件を満たすためには、編集者にとって三つの必要条件がある。それは、理論社社長の小宮山量平氏が「創作出版と企画革命」（小宮山氏編著『企画革命』出版開発社所収）において指摘している問題である。

この講演において、小宮山氏は、編集者の役割として、①つねに総合的認識者という立場を持続できるエキスパートであること。②知的創造の立会人、という役割に徹したエキスパートであること。③自分が制作する出版物を汎く普及するため、特有の見識をそなえ、力量を発揮しうるエキスパートであること、の三つをあげているが、このうち、②について、「立会人という役割には、アシスタントという側面と、アドバイザーという側面とがあります」と指摘し、「これら両面での役割を十分に果たすためには、次に述べる三つの機能を、あたかも生来の人柄のごとく身にそなえなくてはならないと思うのです」と語り、三つの機能をつぎのように区分している。

①「あらゆるものの存在理由について、無限の寛容性をもつということでしょうか。俗に『惚れ易い』とも言えましょう」

②「著者の創造過程に同化するということです。つまり産婆さんが妊婦をはげまして赤ちゃんの誕生を援けるように、著者に寄りそってはげましを送るのです。別のことばで言えば『聞き上手』になるということでしょうか」

③「相対的批判者の立場に立つということです。作家はもちろん、あらゆる創造的な著作者というものは、必ずある程度のナルシシズムのとりことなっているものです。つまり、自分自身はすばらしいことをやっているんだと思い、そのすばらしい自分を鏡に

映してみたいと思うでしょう。そこで、編集者は、ほんとうに澄んだ鏡として著者に対する。それが、ほんとうに澄んだ鏡なら、著者のすばらしさもみにくさも、はっきりと映るに違いありません。それが、作品を高める役割を果たすことでしょう。但し、この相対的批判者の役割こそは、最も温かい心で果たさなければならないのです。さきの『聞き上手』と対の言いまわしをするなら『ほめ上手』と申すべきでしょうか」

小宮山氏はこう語り、「まず惚れる、惚れたからには、とことん聞き入る。その上で、しっかりと相対的批判者として褒め批評をする—このような知的創造の立合人こそ、エキスパートと呼び、真の編集者として信頼したいものです」と語っているが、編集者が「知的創造の立合人」となるには、「惚れ易い」「聞き上手」「ほめ上手」という三つの機能を「あたかも生来の人柄のごとく身にそなえなくてはならない」のである。

こうした資質を編集者が持つことによって、著者ははじめてその編集者に心をうちあけ、よい仕事ができるのである。(152 ペ)

○大切な人柄

だから、編集者は **Art** としての「知的創造力」を発揮するには、その能力が実を結ぶように、著作者との人間関係にまで目配りしてゆかねばならないが、その人間関係を保証するのは、編集者の人柄である。

この点については、主婦の友社の創立者であり、すぐれた婦人雑誌の編集者であった故・石川武美氏も編集記者には天分、熱意、経験、信用のどれもが必要だが、「それらにも増して根本的にたいせつなのは、記者の人物であり、人柄である」(『出版人の遺文』)と述べており、編集者にとって重要なのは人柄であると指摘している。

著者と読者の中間に立って、知的創造の立合人になるべき編集者にとって、窮極的に要請されるのは人柄であるということを忘れてはならない。(153 ペ)

◎◇ロード・モーラン著『チャーチル—生存の戦い—』(河出ワールドブック・1967年)

いわゆる「暴露本」の一步手前で踏みとどまった形の貴重な記録。本文は二段組みでやや取っつきにくい。歴史的意義がある本だが、今の私にとって通読するタイプの本ではない。しかし、訳者あとがきが特に興味深かったので、打つことによりこの機会に勉強しておく。

*

「訳者あとがき」

この日記は、最盛期から死に至るまでのチャーチルと行を共にし、激動する巨人の心

身をつぶさに観察した主治医の貴重な記録です。昨年の春、本書が公開されたとき、英国国民の間に衝撃的な反響を巻き起こしました。偶像破壊を思わせるような記述と人間分析が、“偉大な政治家（ステーツマン）”として誇りにしていたヒーローの意外な一面を白日のもとにさらけ出したからです。とくにクレメンタイン未亡人はじめ長男のランドルフ・チャーチル氏らは、筆者のモーラン卿が故人の全面的な信頼を裏切ったと、きわめて強い言葉で非難しました。また議会方面では、筆者が医師の身でありながら、“診察の秘密”を踏みにじったあげく、プライバシーを侵害したのではないかと物議をかもし出しました。

こうした反響は、とりもなおさず、遺族もふくめてチャーチルの栄光を大切にしたいという英国国民の心情を物語っているわけですが、一方このことは、モーラン日記がいかに率直で大胆なチャーチルの再発見であったかという証左ともいえましよう。

モーラン卿は、以上のような非難に対して本書のまえがきでも述べているように、「後世に伝えるべき歴史の一部だ」と反論を加えてきました。上院に議席を持ち、保守党の医療行政にも関与した政治的関心の強い筆者だけに、歴史的な人物や事件の目撃者として並々ならぬ自負心があったのでしょうし、また事実、一医師の個人的なメモに過ぎない診療日記は、「後世に伝えるべき」ドキュメンタリーとしての多彩で特異な内容を持つと評価されたのでした。とまれ、モーラン卿の観察した人間チャーチルが“歴史の一部”ええあるかどうかは別として、少なくともわたしたちのイメージにあるチャーチル像が、本書によって大いに修正されたことは、まず疑いない事実でありましよう。チャーチルにかつてない親近感、そして人間的な共感をいだかされたといっておよそそうです。

チャーチルのような巨人は、偶像化される宿命を持ちますが、モーラン日記では“乱世の英雄”にふさわしい適性と知略とを備えながら、それに劣らぬ人間的な弱点と苦悩を持った人格として登場しています。偏見と自己陶醉、あるいは権勢欲に憑かれた老貴族の半面ものぞかせます。モーラン卿は外科医のような非情さで、それを摘出してみせるのです。ときには、意地悪な眼差さえ向ける。しかし、彼はチャーチルの老いても衰えぬ洞察力、泉のように尽きぬ人間的魅力に心を引かれずにはいられません。冷酷な目になることがあっても、心はあくまで理解ある友人のそれであり、冷静な信奉者のそれなのです。モーラン日記が単なる偶像破壊、第二次世界大戦の裏面史に墮していないのも、じつはバランスのとれた豊かな観察眼が働いていたからでしょう。

モーラン日記で、もっとも深い感動に誘われるのは、忍びよる死の足音に耳をそばだてるチャーチルの真摯な姿です。いかなる巨人も、崩壊していく肉体的な機能に抗する

術もありません。あれほどの栄光に包まれながら、執念だけによって、それでもなお政治的生命を生きながらえようとする努力は、見方によっては、あまりにも悲惨だと考えられるかも知れません。

その一例として頑健、老獪なスターリンに晩年のルーズヴェルトがしてやられた真相を、モーラン卿は医師の目を通じてみごとに写し出しています。

この日記は確かに、現代の代表的な指導者との出会いを通じて、いわゆる政治家（ステーツマン）とは何か、リーダーシップとは何かということについてじっくり考えさせてくれます。が、それと同時に指導者の適性（ここでは“乱世の英雄も”戦後の平和時に通用しなかったこと）、また指導者の交代、さらに指導者の健康状態といった、ややもすれば個人的な要素が強くからんで、とかく回避されがちな重大問題についても、多くの示唆に富む材料を提供しているように思われます。…（以下略）（373 ペ）

◎◇小島輝正編『年表 世界の文学』（創元社・1972年）

表題の通りの年表に時代の特色を示す解説が少々。暇なときに眺めているとなかなか面白い。

◎◇加藤尚武著『ジョーク哲学史』（河出書房新社・1983年）

ピリリとスパイスの利いた哲学史概観書。「あとがき」に興味深いことが書いてあったので引用して紹介する。

＊

…私がヨーロッパで感じた現在の印象を、この小さな哲学史の「あとがき」として誌（しる）しておきたい。…（中略）…予告されていた時代は終わった。人々が、これから来ると思いこんでいるものは、すでに来ている。予告のとおりではないにしても。

予告の時代に生きていたものは、死んだ鳩の目のように、しぼんで行くのだ。われわれは終わりの後を生きているのに、日だまりの広場の埃を巻き上げて、明日になれば「明日」を告げる者が来ると信じている。それほどまでに、待ち遠しさが、待ち遠しい。

…（中略）…大学の講義だって、それを聴く私には乞食オペラ的一幕に似ていた。プロフェッサーは視界のはずれにちいさく見える。あたりを汗くさい老若男女の学生どもがとりまいている。教室に犬を連れて来ている者もいる。人間と人間はおとなしく講義を聴いているが、退屈した犬と犬はうなり合いをはじめる。飼い主は犬の首を撫でてなだめるが、小声のうなりはいつまでもやまない。犬の隣には、席が足りなくて坐りこんだ

女子学生がリンゴをかじりつづけている。編み物の手を休めない男子学生もいる。一人気教授の講義の出だしは、ミュンヘンではこうしたものなのである。学期の終わりには、聴講する学生は半分ほどに減ってしまうのだが。

どの講義でも、主題として、結局は、ヨーロッパ精神の運命が語られていた。キリスト教が、科学精神、資本主義、人間疎外、日常性、分析哲学の唯物論、等々によっておびやかされているというのが、ほぼ共通の了解であった。キリスト教に終わりを告げたニーチェは、いくたびとなく不吉な予告として引用され、それを語る教授たちの話術はそれぞれに違っていたが、不吉なものの到来を前にした時の特有の緊張感が講堂に広がることに変わりはなかった。

私には、人々がその不吉な予告を好んで聞いているように思えてならなかった。緊張は今日では快感の一種である。終わりの予告が語られているうちは、まだ終わりは来ていないと思うことができる。終わりがカタストロフになるというのは、終わりというものについての偏見である。なしくずしに、いつしかもう終わっているというのが、終わりの本当の姿なのだ。失った恋に、いつしか傷つかなくなってしまった時に、恋は本当に終わっている。今さら棄てたところでどうということもないものを、一方では「棄てれば全てが崩れてしまう」という恐れから、他方では、たんなる自墮落から棄てかねている。人々は教会と教会批判の両方をもてあましていく。

ここには教会がじつに多い。地図の上の教会のマークにピンを立てれば、地図がそのまま針のむしろとなってしまう。しかもそのひとつひとつが石造りのがっちりした建物である。私は日本に宛てて書いた。「教会の棄てどころなし、ヨーロッパ」

話は教会だけではない。あらゆる予告された「時代の終わり」について、われわれはすでに終わりの後を生きている。ただわれわれはそれを認めたがらない。明日になれば「明日」を告げる者が広場に現れることを信じつづける。かんじんなことは、告げられていた終わりが、本当は何の終わりであったかを見究めることであるように思われる。

1983年6月18日 ポッフムにて (266 ペ)

*

巻末の文献案内が充実している。この文章を読んで、日本国憲法や戦後民主主義の精神について改めて考えてみる事ができた。

◎◇吉田秀和著『レコードのモーツァルト』（中央公論社・1975年）

文章は明晰で読みやすい。ただ、大評論家の著作だという先入観から手にしてみたが、

2018年現在、特に手許に置く価値は認められなかった。時代とともに価値観が変化していくということだろう。

◎◇岩城宏之著『棒ふりの休日』（文藝春秋・1979年）

指揮者、岩城宏之氏のエッセイ集。氏はかつて「指揮もできるエッセイスト」との悪口を言われるほど、筆が立つことで知られていた。話題は若干品を欠くこともあるが、とても面白い。エピソードが印象的かつ具体的（たとえば美味しい食べ物・飲み物「松茸・アスパラガス・秋刀魚」など）で、まるで情景が目に浮かぶように書いてあるからだろう。いちばん印象に残ったエッセイは「本場っていったいなんだろう」、引用。

…本場の人たちは、自分たちの本物を、なんとか本場らしくやろうなぞとは、それぞれ毛頭思っていない。本場ではないから、本場らしくやろうということになり、これ即ち本場らしくなくなることになる。本物でないものが本場のようにやろうということに、既に無理があるのだし、本場らしく、なんて思わなくなったときに、本場らしくなることが多い。だが本場っていったい何だろう。本来、存在しないものなのかもしれない。

（133 ペ）

◎◇宇野功芳著『僕の選んだベートーヴェンの名盤』（音楽之友社・1982年）

ヴァイオリン協奏曲はシュミット＝イッセルシュテット指揮ロンドン交響楽団のバックでシェリングが弾いたものが高評価。

「皇帝」で評価が高いのはバレンボイム指揮ロンドン・フィルとルービンシュタインのもの。

他に交響曲で安定して評価が高い指揮者はフルトヴェングラー、ワルター、メンゲルベルク、クナッパーツブッシュ。

ワルター＝コロンビア交響楽団、ベーム＝ウィーン・フィルの「田園」はともに高評価であり、2018年現在一般的な評価と変わっていない。

あとがきから気に入った部分を引用しておく。

…ブルーノ・ワルターは批評というものについて、次のように述べている。「批評は直観によって行うものであり、それは知性に属するのではなく、音楽の創造や演奏の才能と結びつくものだ」。これは、ぼく（宇野）が日頃考えていることと同一意見であり、本書に脈打っているのも、この精神なのである。（323 ペ）

◎◇西岡まさ子著『緒方洪庵の息子たち』（河出書房新社・1992年）

あとがきより抜書き。

…四番目の男子収二郎は森林太郎（鷗外）と学校時代の親友だったが、森林太郎は兵職改革不要論であり、このあとの時代、軍医本部の実力者石黒忠恵（明治23年軍医総監）が麦飯に断固反対する際の学理的支えとなるのだった。（340 ペ）

◇特別企画「廃棄本」からひとつかみ…以上

◎三木雄信（たけのぶ）著『A4 一枚勉強法』（PHP ビジネス新書・2018年）（私物）

核心となるポイント中のポイントはここだと思った。

…結局人間は、無限に時間を与えられると無限に時間をかけてしまいますが、期限を切られると俄然、集中力を発揮して、なんとかこなしてしまうものです。勉強も同様に、時間や締め切りを決めて取り組むことで格段に効率が向上するのです。（57 ペ）

◎矢部宏治著『知ってはいけない』（講談社現代新書・2017年）

矢部氏の過去の著書『日本はなぜ「基地」と「原発」を止められないのか』（集英社インターナショナル）、『日本はなぜ「戦争ができる国」になったのか』（同上）の簡略版という位置づけの本。内容は上記二冊とかなり重複している。篠ノ井高校図書館にリクエストして購入してもらった。漫画が入っていて高校生でも理解しやすい構成。

ザッと流し読みして抜書きしておく価値があると思ったのは次のこと。

*

○丸山眞男は本書で説明されている「大西洋憲章」→「連合共同宣言」→「ダンバートン・オークス提案」→「国連憲章」という歴史的経緯を全く理解しないまま、有名な憲法九条論（「憲法九条をめぐる若干の考察」『後衛の位置から』未来社所収）を書いていた。（179 ペ）

○この見解はかなり初歩的な間違いだ。なぜなら、丸山が問題にしている「平和を愛する諸国民（ピース・ラブング・ピープルズ）」とは、丸山らが言うような抽象的な概念ではなく、本来、「第二次世界大戦に勝利した連合国（およびその国民）」を意味する言葉だからである。それはこれまで本書で見てきたように、国連憲章や大西洋憲章の条文をさかのぼってみればすぐに分かることなのである。（180 ペ）

○つまり丸山は、憲法九条という法学上の問題を議論するにあたって、最低限行うべき、条文をさかのぼって「調べたこと」を書くという作業をせず、ただ自分が「頭で思った

こと」を書いているにすぎない。(183 ペ)

○サイデンステッカー（アメリカ国務省での勤務体験を持つ日本文学者）の丸山評は次のとおり。

「丸山はあくまでも日本的な現象である。さまざまな観念がこんぐらがった彼の文章を見てゆくと、それが対象とする日本国民とその過去の倒錯〔＝丸山のおもな研究テーマだった戦前の軍国主義やファシズムのこと〕についてのべるところよりも、むしろ、その中にあらわにされている「丸山教団」や日本知識人とその現在の倒錯を探るために読みたいという強い誘惑をおぼえる」

つまり、基本的に何を言っているかさっぱりわからず、日本の国外では全く通用しない文章であり、議論であるとはっきり言っているのである。私（矢部）も全面的にこのサイデンステッカーの意見に賛成する。…（中略）…これから私たちはできるだけ、「頭で思ったこと」ではなく、「調べたこと」を持ち寄って、重要な問題をみんなで話し合っていきましょう。おそらく、そこから新しい時代が始まります。(186 ペ)

＊

…要するに、丸山は歴史を学ばずに独り善がりなことを書いている、勉強不足ということだったのである。もう一つ、注目したのは「アメリカの持つ最大の武器」という一節。次に引用する。

＊

アメリカの公文書を読んでいつも感じるのは、「戦後世界の歴史は、法的支配の歴史である」ということです。とにかく、アメリカでは国務省の官僚だけでなく、大統領から将軍たちまでがつねに「法的正当性」についての議論をしています。もちろんそれは「法的公平性」の意味ではなく、国際法の名の下に、相手国にどこまで自分たちに都合のいい取り決めや政策を強要できるか、またそれがどれだけ国際社会の反発を招く可能性があるかということ、常に議論しながら政策を決めているということです。

他国の人間を二十四時間、銃を突きつけて支配することはできない。けれども「国際法→条約→国内法」という法体系でしばっておけば、自分たちは何もしなくても、その国の警察や検察が、都合の悪い人間を勝手に逮捕してくれるので、アメリカはコストゼロで他国を支配できる。戦後世界においては、軍事力ではなく、国際法こそが最大の武器だというわけです。(240 ペ)

＊

戦後の国際社会の秩序の根本にある、冷徹な思考と方法であることを認めざるを得な

い。「法」に対する基本的な理解をはじめとして、こうした戦略的なものの見方が日本人には不足していることも認めざるを得ない。

啓蒙書であるが、こうした重い内容を扱っているのも、侮れない本である。

◎藤原和博著『10年後、君に仕事はあるのか?』（ダイヤモンド社・2017年）

篠高図書館新刊本コーナーで発見。読みやすい。気になった部分を抜書きして紹介。

○キーワードは「情報編集力」＝「正解がないか、正解が一つではない問題を解決する力」。(49 ペ)

○実社会が必要としているのは、(このような)常識、前例、決まりごと、風評、神話に疑問を持って根底からそれを疑い、新たな仮説を提示できる人材です。(67 ペ)

○保守的な官僚や仕事のできないビジネスパーソンに特徴的なのは「遊び」と「戦略性」がないこと。(97 ペ)

○僕（藤原氏）が40年にわたる社会人生活のなかで観察した結果から言うと、総合力として情報編集力の高い人の見た目の特徴は、次の二点です。

①「遊び」があってイマジネーション豊か

②「戦略性」がある

この二つを満たしてれば「仕掛ける側」に回れるのです。…（中略）…「仕事ができる人」「打つ手が当たる人」「人望がある人」「予測が的中する人」「リーダーシップのある人」「マネジメントが上手く行っている人」「業界のイノベーターだと周囲も認めている人」「実際に現代社会を動かしている人」「どうも運が良いように見える人」……そして何より、自分が切り開いた分野で「自分の人生を主人公として生きている人」に共通する特徴でもあります。(113 ペ)

○人気漫画『ドラゴン桜』の桜木健二先生は、物語の冒頭で「世の中のルールは頭の良いやつに都合のいいように作られており、勉強をしないやつはそれに騙されつづける」と言い放ちました。(113 ペ)（たとえば江戸時代以来、現在も続く日米関係はこれに当てはまると思う・柳沢）(113 ペ)

○教育は伝染・感染なんです。だから、何かを無理矢理教えようとしなくてもいいから、自ら学ぶ姿を見せてやってください。じつは、大人の学んでいる姿こそが、子どもにとって最高の教材なんです。結論。「学ぶのが好き！」というオーラは、グーグルには出せない。だから、「学ぶのが好き！」というオーラを出して、子どもたちにその学び方を感染させている教師は、いまから20年経っても生き残るだろうと思います(151 ペ)

○君たちには、できるだけ「間違うと恥ずかしい」「叱られちゃいけない」「失敗するのは恥だ」という感覚を捨ててもらいたいのです。(169 ペ)

◎加藤一二三著『挑みつづける人生』(日本実業出版社・2017年)

篠高図書館の新刊本コーナーで発見。読みやすい。著者は1940年、福岡生まれ。気に入った部分を引用して紹介。

○引退は将棋界の制度によって決まることですから仕方ありません。スポーツの一流選手は、引退するときに、「体力の限界を感じて引退します」という方が多いです。私の場合は気力も体力も充実していてまだまだやる気満々でしたから、制度がなければずっと戦いつづけていたでしょうね。

だからよく「私は、制度によって引退しました」と言っています。(26 ペ)

○私が棋士を天職だと確信するのは、私が指した将棋が人々に感動を与えるような名局になったときです。まずは、後輩の棋士が私の名局を研究したり楽しんだりすること。そうしたことに役立ててもらえればと思います。次にファンやアマチュアの方にも名局を楽しんでもらえること。そうやって私の指した名局が50年、100年、200年経っても人々のよろこびにつながるから、将棋は私の天職だと思っているのですね。(82 ペ)

○将棋の魅力を伝えるには、「ああ、将棋というものは面白いものだ」と感じてもらえるように、本に限らず懇切丁寧にプロセスの面白さを伝えていくことです。音楽なら解説は不要ですが、将棋には解説がどうしても必要です。もちろん音楽の評論家はいますが、解説がなくても「いいものはいい」でしょう。絵も同じ。評論家も解説はしてくれませんが、名画は素人でもいいものは分かります。

野球やサッカーでも、本当のすごさは競技に詳しくないと分からないと思いますが、スーパープレイは誰でも分かります。一方で将棋はかなり実力がないと、手のすごさが分からないので解説が必要です。

NHKの将棋トーナメントの番組では、いろいろな棋士が登場して解説をします。NHKの将棋のテキストを書いている、日浦市郎八段に「加藤先生の解説は、どちらの側が有利か不利かをはっきり言うところが大好きです」と言っていただきました。「他の棋士の解説では、はっきりしません、とか、分かりません、という表現が多いのですが、加藤

先生は明快でどちらがいかすぐに分かります」とも。

それで喜んでいたのですが、娘にこう言われました。「テレビはチャンネルを変えられてしまったらアウト。これで勝負あったと言ってしまったらダメでしょう。解説者は、最後の最後まで分かりません、と言うのが賢明なんですよ」。

その言葉を聞いて反省して、これからは私も他の棋士の解説を見習おうと思います。局面がどちらに有利か不利かくらいはプロなら分かります。それがハッキリ分かるのが棋士だと思っていましたが、解説で他の棋士がそう言っていないところを見ると、あえて言っていないのでしょうかね。

NHKの方には、「スポーツ中継でも同じなんですよ」と言われました。「かなり大きな差がある勝負展開の場合、アナウンサーは不利な側を応援するような話し方をします」と。「ここではまだ不利ですが、劣勢側のチームがなんとか勝つ方法がないか」という話に持っていかないといけない。たとえば10対3で、普通なら勝負ありの試合でも、なんとか挽回できないか、というアナウンスをしないといけないのだそうです。これで勝負ありですと言ってはいけません。勝負の世界の話は、スポーツにも将棋にも通じるのですね。

私は最近テレビによく出ますが、番組では視聴者に退屈を与えてはいけません。惹きつけられないといけないのが業界の宿命なのです。将棋を解説するなら「なんとも言えません。手に汗握る勝負です」という解説です。将棋の終盤もどちらが勝つか分からない方が面白いですから。

プロは勝負が決まってしまうても興味を失いませんが、勝負ありとなると、通常見ている人は興味を失ってしまいます。プロはプロセス重視、素人は結果重視とも言えるでしょう。(99 ペ)

○無数に手があったとしても、もちろん理詰めですから、プロ棋士はパッと盤面を見た瞬間に、検討する価値のある5通りくらいの手が見えます。そしてどんな場面でも、95%くらいは一番いい手が浮かんでくるのです。これは「ひらめき」「直感の手」「第一感」と言っても構いません。なお私は95%と言っていますが、大山さんは85%とおっしゃっていました。

パッと見た瞬間に頭に浮かんでくる手。達人はそうしてひらめいた手を頭の中で検証して「確かにひらめいた手が一番いい」という確認作業をしているのです。

ただし持ち時間が長い将棋なら再確認できるのですが、NHK杯のように持ち時間の短

い将棋（お互いの持ち時間が10分、それを過ぎると一手30秒以内。ただし30秒以内になってから、1分単位の考慮時間が合計10回ある）だと確認作業をしている暇がなく、パッと指さないといけません。

NHK杯で勝てる棋士、優勝回数が多い棋士は、この直観力に優れているのだと思います。（100 ペ）

○私はどんなときでも疲れたということはありません。対局が終わったときに、疲労困憊ということが一回もなく、まだまだ元気なのです。やはり将棋の手を考えて戦っているのが楽しいのでしょうか。

「将棋は我慢比べだ」という棋士もいますが、私はそう思ったことはありません。苦しかったり、相手との我慢比べだったりしたら、とてももたないと思います。私は考えること自体が面白いし、楽しいと感じます。結果にしても、勝てば一番いいけれど、負けても精いっぱい戦って負けたのだから一つの評価が与えられると思っています。

人間は一生懸命戦って、勝ったり負けたりします。また、人生では病気をしたり仕事がかうまくいかなかったり、いろいろと不本意なことも起きるでしょう。私は将棋で1180回負けていますが、これは精いっぱい戦ったことなので、神様の目には少なくとも評価がゼロということはなく、なんらかの評価をしていただいていると思います。

当然ながら、戦う以上はいい将棋を指して勝つことが望ましいのですが、結果が不本意でも落ち込む必要は全くないと考えています。

勝負と同じで、病気やアクシデントのような避けたい出来事も、神様の目から見たら、ゼロやマイナスだとは思っていらっしゃらないのではないのでしょうか。（142 ペ）

○（下線は柳沢）今の世の中も、「やり直しのきく人生」という流れになってきました。一度失敗しても、立ち直れる社会を目指しています。2度3度倒れても、許して復帰させてあげますよと。

聖書には、

「人は転んでも立ち上がる時に手に何かをつかんでいなさい」

という言葉もあります。

転んだとしても、少なくとも土くらいはつかめるでしょうと。つかめるものがあるのだから、つかんで立ち上がりなさい。それが神様の教えです。たくましいですよ。聖書の教えはどんな人もたくましく人生を生き抜くということです。

日本流だと「転んでもただでは起きない」となりますね。(163 ぺ)

○ (下線は柳沢) 関西のある棋士が、タイトル戦の研究を私と一緒にして、それが終わった後に、「加藤先生と一緒に研究して、香車一本強くなりました」と言ってくれたことがあります。その棋士は六段だったのですが、まもなく言葉通り七段に昇段しました。

彼がなぜ香車一本強くなったと感じたのか。

これは私どもの研究の中で「吹っ切る呼吸」をつかんだのだと思います。

棋士は対局中、決断の連続なのですが「吹っ切る呼吸」が分かっているかどうかで全く違ってきます。この棋士は、「いかに決断するか」という問題意識を常に持っていて、私との研究の中で体得したのでしょね。

アマチュアからプロになった棋士の例もあります。

イベント後の食事会で関係者での歓談で、私の話を聞いて「加藤九段の話を聞くと全て前向きで影響を受けました」と言いました。彼はのちにプロ棋士になりました。たった一回出会っただけでいい影響を受けてくれたのは嬉しい限りです。

私との触れ合いによって変化が起こったこの二人に共通するのは、「吹っ切って前に進んだ」ことです。この本を読んで、吹っ切る呼吸をぜひ皆さんも会得してくださいね。

(172 ぺ)

○ (下線は柳沢) イタリアで、ローマ法王になった方が日記でこう書いています。「子どもは弁当箱を背負って生まれてくる」。これはイタリアで好まれる言葉です。その子が食べていく分はちゃんと神様が与えてくださる、ということですね。

うちの娘が大学の友だちに、父と母がそう言っていると話したら、「だって子どもが増えても仕事はどう増えるんだ？」と言われたそうですけどね。

私の仕事はサラリーマンではなく、棋士で自由業です。だから仕事があつたりなかつたりします。三女が生まれたときには、ある出版社から『逆転の将棋』という本を出版して、とても売れました。これで出産費用が出たのです。やはり子どもは弁当箱を持って生まれてくるんですね。

そう思ったら、子育ても楽観的にできるのではないのでしょうか。ある意味、楽観的な人生観は大事だと思います。だから外国の方々の人生観も聞いた方がいいでしょうね。

日本人は弁当箱の話を知らないので「養育費が高くて大変だ」と言っていますから。(186 ぺ)

○（下線は柳沢）私は2回、勝負に負けて大きな自信を持ったことがあります。

1回目は、昭和43年の十段戦の第二局。大山さんに負けはしましたが、「次は十段になれる」と思い、自信が湧いてきました。第一局に負け第二局でも、ゴール寸前に勝ちと気づいた手を指さないで負けたときでした。

打ち上げで二上達也八段（当時）にビールを注いでもらっているときに突然「今回は十段になれる」という予感がしてきたのです。

勝ちがあったことを気づきながら負けた。普通ならかなり落ち込んでもおかしくないのですが、私は全く悔しいとか惜しいとは思いませんでした。

おそらくそのとき十段になれる予感がしたのは、負けた戦いの中に大山さんの弱点をつかみとったからではないかと思います。

2回目は、中原さんに名人戦で4連敗した後に、下井草のカトリック教会でミサにあずかっているとき、神様のメッセージと思われる神秘体験をして、「いつの日にか、きっと名人になれる」と確信しました。

それで精進して、後に十段、そして名人になったのです。

負けて大きな自信が出たのはその2回です。（191 ペ）

*

真剣勝負で生きてきた人ならではのすぐれた人生観にあふれている本だと思った。「転んでもシメタ」「大局観」「使命感」等々、学ぶべきことがたくさんあって、奥行きも感じられ、素晴らしい。

◇次回以降の予告

◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』（講談社＋α文庫・2017年）（私物）

◎左巻健男他著『理科の実験安全マニュアル』（東京書籍・2003年）

◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』（クロスメディア・パブリッシング・2016年）（私物）

◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987年）（私物）

◎^{たくきよしみつ}鐸木能光著『シンプルに使うパソコン術』（講談社ブルーバックス・2007年）（私物）

◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』（ちくま文庫・1992年）（私物）

◎星新一著『気まぐれ指数』（新潮文庫・1973年）（私物）

◎^{かつべみたけ}勝部真長著『上に立つ者の論理』（PHP文庫・1994年）（私物）

- ◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
(日経 BP クラシックス・2010年) (私物)
- ◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』(光文社新書・2011年) (私物)
- ◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』(平凡社ライブラリー・2017年)
(私物)
- ◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』(中公文庫・2005年) (私物)
- ◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』(河出書房新社・2013年) (私物)
- ◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』(新潮社・2014年) (私物)
- ◎ビートたけし著『バカ論』(新潮新書・2017年) (私物)

◇まとめ・つぶやきなど

○メモ転記。「覚悟を決める」ということを言い換えると、「見当がつく」ということ。精神論ではない。「観」の確立。「歴史的な位置づけ」と「空間的な位置づけ」をした上で、自らの力量を押し量ることにより将来を展望すること。[3月1日(木) 11:45]

○2月21日(水)校内の進路研修会(センター試験受験総括)の時に話すコメントを事前にまとめたメモが出てきたので転記しておく。

これからのセンター試験化学の指導以前に生徒に身につけさせたいこと3つ。①モチベーション、②読解力・注意力、③小学校4~6年レベルの計算力(速さと正確さ)。

「大学入試センター試験」を「大学入試」と思う必要はない。見方を変えると、私には「化学」をネタにした「事務処理能力テスト」に見える。

これからの化学受験指導に必要なこと3つ。①平常授業において教科書の基本事項理解の徹底を図る。②「ゲーム感覚」で学ばせ、「攻略法」を意識させること。③勉強により自分の将来を切り開けることに「気づかせる」(「説明する」のではない!)

以上のことを転記しているうちに、「勉強を習慣化してしまい、勉強することに特別な努力や気力を必要としない状態を維持発展させること」も重要だと気づいた。[3月5日(月) 15:00]

○煙草、女心、武士の魂に共通していること。「本当に大切に思ってくれる人にだけ、この身も心も(燃え尽きるまで)献げたい」というココロ。[3月5日(月) 15:10]

○トレーニングの時、武井さん(仮名)から聴いた話。

・新しいことをやれば、足を引っ張る人が必ず現れるし、応援してくれる人もいる。

・自治会で割り当てられた障がい者支援員（ボランティア）の仕事。障がい者の話し相手をするのが任務。常識の範囲内で当たり障りのない話（例：天気の話，好きな食べ物の話などのふつうの世間話）をするだけで終わりにするのもよいが，自分の得意分野の話（例：東京マラソンに出場したときの話，ヨガをするときの呼吸法の話）をすると，とても喜ばれた。ふだん聴けない話は新鮮なようだ。〔3月5日（月）16:50〕

○2018年2月16日（金）茂木健一郎氏，塩谷亮氏のディスカッション（塩尻市・長野県総合教育センターにて）を聴いて

デパートの包み紙をありがたがる時代が終わった。中身が勝負。ICTの説明をするなら，これによって得られた素晴らしい成果をドーンと提示して，そこから「どうやればいいんだろうか」と紹介するのが筋。

前置きをだらだらやってもしょうがない。文部科学省は終わっている。〔3月7日（水）8:57〕

○ICT(Information and Communication Technology)は「[情報通信技術](#)」の略であり，IT(Information Technology)とほぼ同義の意味を持つが、[コンピューター](#)関連の技術をIT，コンピューター技術の活用に着目する場合をICTと，区別して用いる場合もある。国際的にICTが定着していることなどから，日本でも近年ICTがITに代わる言葉として広まりつつある。〔<https://kotobank.jp/word/ICT-13781>より〕〔3月14日（水）午後〕

○篠ノ井高校の同窓会長さんがいつも話をしてくれる教師論，検索の結果，出典等の詳細が分かったので貼っておく。http://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000025737

○夜，誰もいない家に帰って電灯のスイッチを入れると，部屋が明るくなる。勉強もこれと同じだ。授業というのはスイッチをオンにする作業だ。スイッチを入れればその分野について「明るくなる」のだ。わからないのは，スイッチが入っていないから。正しくスイッチを入れればよい。授業というのは何も無いところに電灯をセットする作業ではなく，生徒の中に元からあったものを使えるようにする作業なのだ。「苦しくとも歯を食いしばって頭に詰め込めば，勉強ができるようになる」というイメージは大いなる誤りだと思う。今の私が正しいと思っているイメージはむしろその逆で，ストッパーを外せば動くようになる。リミッターを外せばできるようになる。スイッチを入れれば明るくなる。こういうイメージが大事だと思い，先日の理科の送別会で話したら，同意が得られて心強く思った。〔以上，3月15日（木）11:20〕

◆「予定時刻となったので」「本稿はこれで打ち留め印刷へ」。「最後までお読み下さりあ

りがとう」「異動して新たなことができる春」。〔3月16日（金）16：00脱稿〕